

第四章 文章と手話

自然増加

出生数から死亡数を引いたものが自然増加だが、二十八年には百九万人と、ちよつど宮崎県全体の人口がふえた。二十七年は百二十三万五千人ふえ(大分県のみ)、二十七年は百三十一万四千人ふえて(青森県のみ)、年々低下はしてゐるものゝ、いぜん増加をたどつてゐる。総人口は中国の四億六千万人、印度三億七千万人、ソ連一億九千万人、米國一億六千万人に及びて第五位だ。ほゞ日本と同一面積を持つフィンランドがわづか四百十万人、二割程大きいスウェーデンが七百二十万人であることなど考えれば、日本の人口圧力の苛酷は、いよゝゝ深刻化してゐる。半世紀前と比べると一平方軒当り密度が一八六だつたのが二十三年には三二六となつた。昭和四十五年には一億に達し、同九十年頃には二億を割り始めないと、學者の推測だ。これは出生率が低下しても、人間に子を持つ本能がある以上、無制限には下らなひ。また出生低下と死亡低下が並行してゆくことは人口の老齡化を意味し、昭和九十年頃、二の老齡人口の壽命が来て下り始めるだろうといふのだ。この人口老齡化は日本人の平均壽命が二十八年は男六十二・八才、女六十六・三才に伸びることが物語つてゐる。

自然増加

生れた 人 数 から 死ぬ 人 数 引く 自然 多く けれどモ 二十八年 百九
 万人 丁度 宮崎県 同位位 人口 ふえる 二十七年 百二十三万五千人 ふえる
 二十六年 百三十一万四千人 ふえる 青森 同位位 年 少し 多く 所 出る 全
 部 人口 中国 四億六千万人 印度 三億七千万人 ソ連 一億九千万人 米國 一
 億六千万人 次ぎ 日本 五番目 殆ど 日本 同位位 大さひ國 フィンランド 人
 少ひ 四百十万人 日本より 土地大さひ 國 スウェーデン 七百二十万 争考え
 る 日本人 多すぎる 本當 昭和十年 一平方軒 人住む 一八六 二十五年 二二
 六 昭和四十五年 一億 多く 九十年 なし 一億台 存らなひ 學者 考える 生
 れた 割合 少ひ 人間 子 欲しひ 庄れつき 性質 辛抱 難しひ けれど もつ
 と上 おわり なし 又 生れる 低ひ 死ぬ 低ひ 同位 人口 年寄り 多ひ 昭
 和九十年 老齡 人 命 低ひ 思う 人口 老人 日本人 平均命 二十八年 男
 六十二・八才 女 六十六・三 証びる 話 ある

人口はどう動いてゐるか

この狭い国土に毎年百万からふえてゐる、この調子だと二十八年末の八千七百二十万人も、
 昭和四十五年には一億を突破する見通して、それこそ家を建てる土地もなく、腹が満ちて
 も満足に食えなると云つた押し合ひ、へし合ひの生活になりかねなし。人口學者が口を揃
 えて「これは脅威だ」と叫んでゐるのも当然のこと、そこで、政府は、認同機関として昨
 年十月発足した人口問題審議会(会長法博下村宏氏)に「人口政策」の妙案を練る依頼ん

でいるが、仲々進航の体。一方、民間側でも、この程、結成された日本家族計画連盟(会長下條康庵)が去る十八日に受胎調節で有名なサンガー夫人を招いて創立記念大会を開き人口問題解決への氣勢をあげた。ところで、このやつかひな人口は、今どう動いてゐるか、結婚、出生、死亡等、厚生省統計調査部の数字から、吾威の要を追ってみよう。

人口はどう動いてゐるか

平井 訳

国 狭い 毎年 人 百万 ぶえる 昭和二十八年末 人々 八千七百二十万人 ある
 昭和十五年 一億 過ぎる 思う 家 巨くさん 建てる 必要 けれども 土地
 足りない 食物 足りない 満足 進しし 生活 困る 将来 分らない 学者 皆
 恐し 云う 当り前 それで政府 色々 考える 昨年 十月 建てる 会 ある
 名前 人口問題研究会 会長 下村宏 頼む 人口 争 良し 考え 欲しし 調査
 在せる けれど 方法 進しし 又 政府 別 運動 ある 会 名前 日本家族計
 画連盟 会長 下條康庵 サンガー 女 アメリカ、招待 創立 記念 会 開く
 人口 問題 心配 なし よう 運動 する 報告する
 人 数 ぶえる 大変めんどう 複雑 数 多い 少ない 結婚 赤ん坊 生れる 老
 人 死ぬ 割合 調べる 見る 必要
 人口はどう動いてゐるか

広瀬 訳

狭い 国 毎年 百万 人 ぶえる 二十八年 終り 八千七百二十万人 昭和十五
 年 一億 過ぎる それで 家 建てる 土地 なし 腹 減る 満足 食えない 又
 生活 進しし 学者 皆 恐しし 叫ぶ 当り前 政府 責任 昨年 十月 人口

同類 束 考える よう 頼む が 達しし らしし 人々 ばかり 作る 日本 家
 族 計画 運盟 前 十八日 赤ん坊 生む 防ぐ 争 作つた 有名 人 拙く 始
 める 建てる 記念 大会 開く 人口問題 早く 終る よう 頑張る 面倒 人数
 今 生活 結婚 生れ 死ぬ 政府 調べる 人々 恐ろしい 妻 見よう

生活を豊かに(人間生活のはじまり)

始めに地球上に現れた人間は、自然にある生物を生まのまゝ食ひ、木蔭や岩々の洞窟に住んでいました。これだけの事ならば、けだものの生活と少しの違いもありません。人間が万物の靈長だなど、感傷する事でもきない訳です。しかし、大昔の人達の中にも、自分達の生活をもっと氣持の良いものにしようとする進んだ考えを持つ人もあつた事でしょう。その人達は毎日くり返されてゐる生活の体験を活かして、住居、衣服、食物等、日常生活の上に色々工夫を加え始めました。

人間が動物学的に、一番近いとされてゐる猿類とさえも、全く違ふ点は、皆が知つてゐるように、言葉を用ひて話をしたり衣服を着たり住居を作つたりする点ですが、更に大きな違ひは、住居の中で生活するといふ点です。火を使うようになるのとそれまで、なまのまゝで食べたり食物を煮たり焼いたりし、火を利用して土器とか金属器とかゆう便利な道具を作りだし、これらを上手に使うことによつてそれ迄よりもっと豊かな生活をすることができるようになりました。これが人間の生活の起りであり、次から次へと工夫改良されていつか、いきさつが、人間生活発達の歴史なのです。それでは人間が始めて作つた住居はどのようなもの

てあり、始めて着衣はどの採なものであつたでしょうか、又、その頃の食物はどんなもの
のだったでしょうか？

生活を豊かに(人間生活のはじまり)

平 井 訳

音々 拾めて 地球 出現 七べもの 自然 ある 魚 鳥 草木 果 獲る その

まゝ 食べる 焼く 味付けない 生きている すぐ 食べる 家 ない 大きい 木

陰 又 大きい 岩 穴 中 住む このような生活 簡單 動物 生活 同じ 人

間 動物 たくさん中 一ばん 賢い 威張る 出来ない けれど 昔々 人々 大

くさん ひる けれど 自分達 生きる 方法 もっと 巨のしひ 欲しい 便利

ほしい 考える 考え 賢い 人 あつた 思ふ せして 生活 毎日 同じ くり返

す 色々 けいけん 利用する 少し 思ひつけて 変える 良い 又 考える 変え

る 少しづつ 変える

人間 動物 ちがう 動物中 猿 一ばん 賢い けれど 人間 遠う 理由 省 知

つてる 何故か 一つに 人間 言葉 ある 人々 たくさん 話し 合ふ いろく

習習 交換 ある みしこく なる 二つに 着物 きる 三つに もっと 大きい

違い 何か 家 建てる 家々 住む 動物 家 ない 人間 火 大丈夫 魚 焼く

煮る 美味しい 前 ちがう 生ま まづい 焼く 良い 又 土 こねる ごはん

食べる入れもの作る 魚 獲る 道具 作る 色々 作る 便利 人間 だんく 生

活 幸福 大丈夫 人間 昔から今まで 生活 少しづつ (だんく) 変る それ

人間生活 変遷発達 丁史 云う 昔 人間 着物 どんなか、昔 人間 食べる

どんなものか？ 想像する 面白い ある

武蔵野

独歩

昔の武蔵野は豊原のはてなき光景をもって絶類の美をならして来たように云ひ伝えてあるが今の武蔵野は林である。林は奥に今の武蔵野の特色とひいても良い。すなわち木は主に樅の類で冬はこぼれ落ち葉し、春はしたるばかりの新緑もえ出するその変化が秩父嶺以東十数里の野にせしに行われて、春夏秋冬を通じてかすみ雨に月に風に霧にしぐれに露に雪に緑蔭に紅葉に、さまざまの光景を呈するその妙はちよつと西国地方又は東北の者には解しかねるのである。元来日本人はこれまで樅のたぐいの落葉林の美を余り知らなかつたようである。林と云えばおもに松林のみが日本の文学美術の上に認められていて敵にも樅林の奥でしぐれを圃くというようなことは見当らぬ。自分も西国に人となつて少年の時始めて東京に上つてから十年になるが落葉林の美を解するに至つたのは近來のことである。

武蔵野

平井 訳

所	武蔵野	木	大きくさん	林	けれど	音	草原	遅く	迄	長く	今	林	特徴												
ある	生える	木	殆ど	樅	冬	皆	葉	落ちる	春	宵	新しい	芽	生える												
冬	葉	な	い	春	青	い	葉	たくさん	しろく	変る	風	ふく	苗	ふる	時	ある									
月	きれ	い	時	ある	雪	ふる	杯	皆	白	い	変る	秋	葉	紅	く	変る	色								
変る	珍	し	い	興	味	ある	良	い	本	当	見	る	良	い	圃	く	だ	け	足	り	な	い	日	本	
人	々	林	きれ	い	良	い	理	解	な	い	つ	ま	ら	な	い	思	う	ら	し	い	松	林	有	名	歌

文章 たくさん 人 ある 松林 良し 響く 絵 ある けれど 武蔵野 松林
 ちがう 木 楳 冬 葉 なし 却って 良し 日本 人々 あんまり 知らな
 自介 同じ 東京 来る 十年 居る けれど 武蔵野 良し きれは 昔 知らな

大音寺前

樋口一葉

九日 晴 この二日より晴れ共 日々図書館に通じて暮しけるが 今日では行か
 向にともりて書を読む 店は昨日、一昨日より売れ高、ひと多くなりて形子の忙し
 こと 打ちひまなし さるは 近き所にもとよりありける家の わが家に売りに買
 て店を閉じけるが二軒ある由にきけば それがたぬなるにや さしもきそひ心などの
 あるにもあらず おのずからに任せて商うものから 店をあずかる形子に運とゆうも
 のあればなるべし

二十三日 雲野子より「文字界」の投稿うながしきたる ひまはまとまらずして 今日日は
 夜もすがら起きたり

二十四日 終日つとめてなおならず 又夜とともにす 二日二夜程 つゆ眠らざりけるに
 まなこはいとどさえて 氣は ひよいよ澄みゆくものから 壁とりて何事かんと思
 うことは たゞ壁の中を分くるようにあやしう一ところをのみ行きかえるよ ひか
 て明日迄につゞり終らばや これならずんば死すともやめじとたゞ案じに案ず かく
 もうもうろろろたるけしき まことに深夜のみせし且にせまりて まなこはいとど

さえゆきぬ かくても文辞は筆にのぼらず とかくして一番どりの声も聞えぬ 心は
いよ／＼せわしくなりてあれよりこれ 三れよりあれに移り 筆は更に動かんともせ
ず たゞねむるともなく打ちふしたり

大音寺前

平井 訳

九日 晴 二日 から 今日 迄 雨 降る 日 晴れる 日 毎日 本 読む 所
通う 勉強 した けれど 今日 本 読む 所 休む 家 奥 居る 一日
本 読む 店 忙しい 昨日 今日 最も 忙しい 妹 商売 一生懸命
座る 時間 なし それは 近所 同じ 商売 店 あった けれど 暇 忙
しくない 仕方なし 店 止め 家 二つ ある それで 私 家 商売 倍
忙しい 特別 商売 熱心 なし けれど 妹 商売 上手 遅 良い 為
商売 忙しい 思う

二十三日 星野 手紙 来る 「文学界」提出 小説 早く 作って 録せい 云わ

れる けれど 文 作る 考え 未だ 方法 迷ってひる 徹夜 する

二十四日 朝 晩まで 一生懸命 文章 考える けれど 未だ 終る ない

夜 文 文章 作る 二日 と 徹夜 二晩 少しも 眠らない けれど ち

つとも 眠くない 暇 はうさり 頭 澄み切る それで 文章 書く けれ

ど 上手 書く むっかしい 同じこと くり返し書く 進む ない 困る

明日 朝迄 終る むっかしい もし 書く だめ けれど 諦めない 死ぬ

かまわなし 一生鼎命 文章 考える 深夜 鐘 声 聞える 頭 もつと
 もつと はっきり する 窓 月 光 射す 霜 映る ぼやける きれひ
 夜 景色 きれひ 静か 目 はっきり してます 眠くなり 文章 上手
 書く 大丈夫 決つてゐる 遊覧 良ひ けれど 文章 作る なひ かく
 むつかしひ ぜんく 朝 なる 心 あせる ひろく 考える 結局 明
 るく なる 朝 来る 飛 産る じつと する 少し 眠る

風車小屋

ドリーゼー

この辺はね 貴方 昔から今のようにさびれた物音一つしなひなんて所じやありません
 でした。以前には粉ひきの商売が繁昌して十里四方の百姓達が皆、こゝへ夢をひいても
 らいに来たもんです。……村のぐるりの丘に風車がのつていました。右を向いても、左
 を見ても目に入るものは松林の上で、ミストラルに、ぐるく回る風車の響と、あちら
 こちらの坂道を上つたり下りたりしてゐる袋を積んだ小さなるばの行列です。月曜から
 土曜まで、丘の上ではムチが鳴る。羽がパタ／＼音を立てる。粉ひき小僧は、るばにハ
 イドウドウウッて……、固くからに氣持の良しもんでした。

日曜日には皆で隊を組んで、ほう／＼の風車へぞかけました。上では粉ひき達がミユス
 カをぞちぞちします。おかみさんはレースの肩かけや金の十字架なんかつけて女王様の
 ようにきれひでした。私は雷を持ってゆきました。とつぷり日の暮れるまで皆でフアラ
 ンドトルを踊つたりしたもんです。つまりこの風車のおかげで土地はにぎやかでもあり、

繁昌もし巳んです。

風車小屋

平井 試

この 辺 今 淋しい 何も きこえない けれども 昔 違う 昔 粉 ひ
 く 商売 たくさん あり 杜しい 遠い 村 十里 ぐらひ はなれた 場
 所 住む 百姓 皆 こゝ 来る 麦 引してもらう ため 麥 持っ 来る
 村 まわり 低い 山々 頂上 風車 ある あちら こちら ながめる
 松林の上 風車 廻る ぐる／＼ 廻る 又 所々 坂 道 馬 昇る 行く
 下りる ろば 背中 袋 のせる 袋 麥 入ってる 小さな 馬(ろば)
 刃ぎ／＼ ならび 進む 日旺から 土旺まで 毎日／＼ 低い山 上 粉
 ひく 商売 杜しい 風車 羽 ばた／＼ 聞える 丁稚 馬 ムチ 叩く
 粉 ひく 働く 丁稚 馬 一しよ 遊ぶ みる のんびり たのしい 日
 旺日 粉 ひく商売 休む 皆 友 達 一しよ 風車小屋 行く 小屋
 粉 ひく人々 酒 くれる おもてなし よろしい 名 ミヨスカ いう
 美味しい 酒 この 酒 ぶどう 汁 へでし 作る 小屋 妻 レース
 肩掛 着る 胸 金 十字架 かける 女王 よう きれひ ある 私 笛
 好き 持ってゆく 笛 吹く 遊ぶ 陽 沈む 暗し まで 皆 たのしい
 踊る 風車小屋 ある だから 村 にぎやか 商売 大丈夫 杜しい 仁
 ぎやか たのしい かつた

童話

平井栄美子

昔 父 母 子供 三人 犬 一つ 一しよ 居る 父 母 やさしい 幸福 です
 父 旅行 遠く 行く 皆 別れる 淋しい 旅行 行く おみやげ 何 欲しいか？
 大きく 子供 一ばん 上 女の子 きれいな 着物 おみやげ 欲しい いいました
 二番目 子供 女 おいしし 珍しい お菓子 おみやげ 欲しい いいました 三番
 目 一ばん 小さい 女の子 花 きれい たくさん 欲しい 云いました 一ばん
 下 子供 性質 やさしい おとなしい 父 母 特別 かわいがる
 父 旅行 いく 毎日 毎日 歩く 珍しい 色々 ある として 用事 終る おみ
 やげ たくさん 買う けれど 小さい 女子 約束 した 遅い きれい ありません
 一生懸命 探す けれど むつかしい 困る 若し 花 おみやげ なし 家 帰る
 小さい 女子 さびしい かわいそう 一ばん 上 二ばん目 女子 おみやげ き
 れい 着物 お菓子 たくさん 買いました 三ばん目 女子 何も なし かわいそ
 う 父 心配

花 欲しい 毎日 探す それで 今日 特別 選い 歩く 森 さびしい 父
 一人 歩く むこう きれい 家 ある あちら 森 中 おかしし 誰 いない
 おかしい 父 寂 並く 歩く 寂 みる びっくり した 珍しい 美しい 花 花
 くんさん 咲く たくさん ある きれい すぎる 女 かんしん する そして 女子
 花 おみやげ 約束 思ひ出す 家 戸 たくさん 花 欲しい 切る かまいませんか

？ お願ひ 思う けれど 誰 いません 仕方ない 然んく 夕方 なる 暗い
 父 迷う けれど 結局 一人で 花 切る 持つ 帰る 思う 一足 二足 歩く
 時 誰か くる 界 獲 思ひ 鬼 です 鬼 怒つてる 父 花 切る 花 棒 同じ
 間違う 父 わけ 話す あやまる けれど 鬼 理解 ない 思 いう 仕方ない
 父 家 帰る かまわなひ おこらなひ けれど 代り 父 家 帰る 時 初めて
 逢う 家 人々 子供 誰れ かまいません 初めて 逢う 人 一人 私 娘
 し 云う お父さん 困りました 子供 もし 初めて 逢う 子供 鬼 あげる
 子供 かわいそう けれど もし 鬼 父 思ひ 家 帰る 誰し 母 子供 生活
 方法 ない ひろく 考える 父 よし 考え ある 家 帰る 多分 犬 走る
 むかえる 決つてる ひつも 犬 一ばん 早い むかえる 決つてる 鬼いま
 した 犬 鬼 家 上げる よし 犬 かわいそう けれど 仕方ない 思ひました
 鬼と 約束 する 初めて 逢う 家 人々 一人 鬼 上げる 約束 鬼 別れる
 旅行 終る おみやげ もつ 家 帰る 家 近く 来る 誰 会う 心配 した け
 れど やっぱり 一ばん 下 小さい 女の子 会う 女の子 父 旅行 ひく 後
 淋しい 毎日 待つ 父 帰る みる うれしく 走る 父 がっかり 鬼と 約束
 話す 父 女の子 かわいし 鬼 上げる づらい 女の子 別れる づらい 鬼 約
 束 破る かまわなひ 言う 女の子 考える 鬼 思ひ けれど もし 自分 鬼
 家 行く ない 父 うそつき 立場 ない 鬼 持つてる 父 あきらめる 鬼 家
 ゆく 云う 父 仕方ない 昏 泣く そして 子供 送る 鬼 家 女の子 淋し

い	女	踊る	娘	一人	鬼	家	ひる	泣く	だけ	けれど	鬼	やさしい	いろい
ろ	本	ある	きれい	花	ある	女の子	だんく	なれる	鬼	好き	毎日	鬼	
話	する	鬼	前	一人	淋しい	女の子	来る	うれしい	鬼のしい	ほか	ら	女	
の子	女	母	子供	なつかしい	けれど	さみしく	な	鬼	一しよ	たのしく			
遊ぶ	半狂	すぎる											

以上、文章表現と手話での表現について対比させてみたが、手話には、確定した文法則はなく、従ってこのように、手話表現をそのままに列挙してみても、一般人には何のことも解らないだろう。ところが「手話」によって表現されるならば、死と現文章に近しい意味の伝達が可能なわけである。勿論、実際には「手話」表現をする人によって、その表現の手段（詩情や、引例や、身振り、表情の附け方）は、必ずしも同一でなく、ここには、理解し易さや、上手、下手の問題があるのだが、大体において、「手話」は、このように助詞や助動詞の伴わない基本語彙を並べて、その意味や内容を表出し伝達するのである。

こうしてみれば「手話」はおそらく、文章の芸術性からは後退し表現とかわねばなるまい。（反面、「手話」は演劇的要素を帯びていて、又、これだけでは何とどう原始的な表現手段であるだろうか。そうしてその野も仕方あるまい。ただ、考えてみたにすぎないのは、聾者の吾々は、ここに挙げた「手話」から、直ちに、音声言語としての日本語を理解出来るだけの能力を身につけつつあると仰うことである。或いは、大勢の聾者は教育されることに

よつて一応体系的な日本語の理解の上で、手紙としての「手話」を用ひることが出来るようになる。

結 語

月日を経てどにかくも一応結末をつげに九月の最後の日にこれらに對するまどめと、そしてこれからの表現につけて伊東さんを中心にして僕たちは語り合つた。伊東さんが手話の研究集巻を携えて更上し国立国語研究所を訪ひ、再び巻を合せた時のみゆげに手話の抽象性を皆で検討しようという方向が芽生れた。手話の語彙は、その大部分が具体的な思考、環境内での通達手段として生れサインとしての意味はあつても、シンボルとしての意味は少い。言語の発達から考えても高度に抽象化された言語を持つ民族程その思考過程は複雑で文化程度も高し。それならば、吾々も又、手話の現状を現象論的思考を發現するに如何程努力があるか、爾ち手話の抽象性の限界を調査し然る後に今後の手話の方向づけをゆるべきであらう。同じうが、吾々の意見は、その時、僕の友人運ばそれらの説明のすべてを納得したが、然し誰も彼もその現状での困難を力説していた。同じころ吾々もその程度、段階差に各段の冊きがあり、(口話)文字によつて教育された自分たちであるからこそ、それらを手話に譯衆して意味を把握出来るとしても、手話そのものを以て高次の抽象性を表現することは、到底不可能であるとの論に傾いた。然しそれゆえにこそ、なおさらに吾々は前進せねばならぬ。若い世代は新しい考え方で、そしてその結果として現われる表現様式を生むに違ひないとは僕は考えている。今こゝらの仕事の将来を思いながら、未知の分野と、そして時代の動きを、この六ヶ月の研究会の日々の話し合いの中にさえ、しみじみと考えるのである。

終りに、本小冊子は京都市民生局、前身体障害者連合会、大内会その他から深いご理解と一

方好の図が世話のもとに舞行せざるに成りなり。二二に記して深甚なる謝意を甲斐にてお
せし。

参考 (第一、二章)
指文字

ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
					
ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
					
フ	ヌ	ツ	ス	タ	ウ
					
ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
					
ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
					

ガ、ザ、ダ、バ行の濁音は清音の指の形のまま↑へ。
パ行の半濁音は清音の指の形のまま↑へ。

